

「共にあゆむ」

I ヨハネ 1 : 1 - 3

神田 明美

(導入)

皆さん、おはようございます。先週の日曜の午後から松原湖に外部奉仕に行くということで多くの方が声をかけてくださいました。祈りに覚えてくださりありがとうございました。

松原湖のあとすぐGW青年キャンプで私自身もいやあ、今回も何でこんな無謀なスケジュールになってしまったんだろうと思しながら、松原湖に行きましたが、普段のキャンプでは中々交わることのできないキッチンやグラウンド奉仕者、しかも若い世代の子たちとゆっくり交わることができ、これからのキャンプについて語り合い、これまでのキャンプの恵みを分かち合い、そして、夏に向けてのキャンプ場の準備をすることができました。

また、松原湖で2019年のフロンティアで私がカウンセラーをした当時中学生だった子と再会することができ、その子が献身して今東京基督教大学に通っているということも知ることができました。本当に嬉しい知らせです。次世代が育ってきていることを通して励ましてくださるだけじゃなく、今来年のフロンティアに向けて準備していますが、そのことにおいても励ましてくださる神様がいらっしゃいました。神様は私のことを見てくださっているし、導いてくださっていることを再確認してることができました。

また、GW青年キャンプのために祈ってくださりありがとうございました。金曜に青年たちと無事に恵みを受け取って、燃やされて帰ってることができました。今日は、チョヨン先生が新年度から教会スタッフ、そして初青年キャンプということで、緊張され疲れが出たのか、体調を崩されたので、私が代わりにキャンプで受けた恵みと、みことばを皆さんとお分かちさせていただきます。

神様最近私にとってもスパルタです。この新年度に様々な働きが同時に始まったのもそうですが、今日のメッセージもキャンプの余韻に浸る暇なく、現実に戻され、恵みとみことばを分かち合う機会がこんなすぐに与えられました(笑)

でも、よくよく考えてみると。。。自分が1月のメッセージで、ハバクク書の『私は、自分の物見のやぐらに立ち、砦にしかと立って見張り、私の訴えについて、主が私に何を語られるか、私がそれにどう応じるべきかを見よう。』この2023年も与えられている特権をフルに活用し、神様と格闘していきましょう』と語ったことを思い出します。神様は本当に祈りを聞かれ、有言実行してくださる方です。ぜひチョヨン先生の体調の回復のために祈っていただけると感謝です。

5月は新年度の疲れがどっと出てきて、体調を崩しやすい時期でもありますが、皆さんは、体調はいかがですか？そう言っている私も、キャンプで思いっきり賛美したのと、水上が思った以上に寒く喉の調子を崩してしまったので、今日はマスクをして説教させていただきます。

では、一緒に本日の聖書箇所を見ましょう。ヨハネの手紙第一 1：1-3 です。聖書をお持ちでない方はスクリーンにも出ますので、そちらをご覧ください。そして、聖書朗読後に、青年キャンプの振り返り動画があるので見たいと思います。では、お読みします。ヨハネの手紙第一 1：1-3

#### I ヨハネ 1：1-3

- 1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。
- 2 このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。
- 3 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。
- 4 これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。

#### 動画

(本文)

#### ○ヨハネの手紙について

動画から青年キャンプの恵みと祝福が少し伝わったでしょうか？青年たちの表情を見ましたか？イエス様にある交わりといのちのみことばによって生き生きとされていく青年たちを見ることができたと思います。まさに絶望と悲しみの中背にして離れていく二人の弟子が、復活のイエス様に会い、心燃やされエルサレムに戻って行ったエマオの途上のようなキャンプだったのでなかったかと振り返ります。

今回のキャンプの講師は、動画にもありましたが、牧師であり、画家でもある、早矢仕じょーじ先生でした。そして、先生は今回4福音書のイエス様の復活の箇所から「イエス様は今も生きておられる」と優しくも力強く、私たちにメッセージを語っていただきました。その内容が凝縮されているのが、今日の聖書箇所です。

これまでの手紙には書き手と受け取り手について、そして挨拶から始まりましたが、今日読んだヨハネの手紙は、そういったものがなく、すぐにこの手紙の目的について書き始められています。その目的は、受肉され、人となってこの地に来られたイエス様の目撃者であるヨハネ自身が、そのこと、イエス様の受肉を証しすることからです。

なぜヨハネは受肉について語る必要があったのでしょうか？それは、この時の教会、またクリスチャンたちが、イエス様が復活されてから50年も経たないかぐらい、イエス様の直々の弟子たちが殉教してもういなくなろうとしている時期に、イエス様がどういう方で、どうしてこの地に来られたかがだんだんと分からなくなってきたからです。他の宗教や哲学などから持ってきた教えによって、クリスチャンたちの信仰を装い、揺さぶってくるものたちが出てきたからです。

神秘的な存在は、神秘的以上に、目に見えず永遠だというギリシャ哲学者たちの思想などを受け入れ、霊は善で、肉は悪だという霊肉二元論でイエス様が人として来られたことを否定するグノーシス主義と呼ばれる人たちの教えを受け入れ、イエス様は人ではない、イエス様が肉の体をもってこの地に来れたはずがないと言い出してしまおうクリスチャンがいたんです。受肉はあり得ないと否定するので、もちろん、彼らはイエス様の十字架の辱め、贖い、死を否定しました。そして、十字架の苦難は救いとはならない。だから復活による勝利もない。上からのより高い知識が人を救いに導くのだと。そして、肉はもともと悪だから、いくら罪を犯しても問題ないと主張しながら、快楽を貪り、罪を犯していく人たちが出てきたのです。

それに対してヨハネは、ヨハネの福音書13-17章までのイエス様の最後の言葉を中心にこの手紙を書き始めます。ヨハネは、グノーシス主義の教えによって揺さぶられ、つまづいていくクリスチャンたちにこの手紙を通して二つのことを強調し伝えています。一つは、5節以降にあります、「神は光だ」ということ、そして二つ目は、「神は愛だ」ということ。そして、私たちに与えられている信仰がどういうものなのか、私たちのために来てくださったイエス様がどんな方か思い出せと語るのです。

#### ○初めからおられた方

その手紙の最初は何と始まっているのでしょうか？1節。

**1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。**

ここでの「私たち」とはどんな人たちのことでしょうか？これは、単にイエス様の言葉を遠くから聞き、イエス様を遠くから見た群衆の一人一人ではなく、イエス様と親しい関係にあった人たちのことです。イエス様の近くでイエス様と顔と顔を合わせて、話される言葉を直接聞き、教えを受け、イエス様がなされる働き、御業をまじかで見、イエス様にふれた、ととても親密だった者たちのことです。特に「自分の手でさわったもの」という表現は、イエス様の復活の出来事を念頭に置いた言葉です。この言葉を聞き、復活されたイエス様に触れていく弟子たち、弟子たちが信じられるように、ご自分を触らせ、食べ物を食べられるイエス様の姿が思い起こされます。

ヨハネがこのように肉体をもって来られたイエス様を強調する理由は何でしょうか？それは、この当時のクリスチャンが異端の影響によって、イエス様の人性を否定し、神性だけを強調しながらキリストの受肉と十字架と復活を否定したからです。だからその当時生きていた唯一の弟子ヨハネは、自分がこれまで直接体験し、聞いて、見て、さわったイエス様について話しながら、イエス様がどんな方かをもう一度証し、異端の間違った教えに揺さぶられてはいけないと励まし教えたんです。

林先生は、キャンプのメッセージで、私たち青年に、何度も「キリストは生きている」けど「あなたのキリストは生きているか？」「あなたが信じているのは本当に復活された主、イエスか？」とみことばから問うてくれました。マルコの福音書は復活のイエス様が出て来ないでぶつと完結を見せずに終わっている。そして、そこから「イエス様は今どこにおられるか？」と私たちに聞いていると。復活の出来事は終わってません。今も続いています。私たちの信じる、皆さんが今信じている復活されたイエス様はどこにおられるのでしょうか。私たちが信じようが信じまいが、理解できようができまいが、イエス・キリストの復活は起こった、そして今も起こっている事実であり、私たちは毎日イエス様と会えるという恵みの中を生かされていて、私たちの存在そのものがそのことの証しであると聖書は言います。そして、弟子たちが復活の主にガリラヤで、信仰のスタートしたガリラヤで再開したことによって彼らの歩みが再スタートしたように、私たちも日々、イエス様との出会いを通して歩みが日々スタートしていくのです。林先生の初日の集会で言われた、「出会うのはあなた」という言葉を皆さんにもプレゼントします。

#### ○父なる神様と共におられたイエス様

2節でも、ヨハネはイエス様の受肉を「いのちが現れた」と語ります。2節

2 このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証しして、あなたがたに伝えます。

そして、イエス様の受肉の前のことも話しつつ、イエス様が父なる神様と共にいたけど、私たちが罪から救うために、永遠のいのちとして人として来られたと語ります。なぜなら、先ほども言いましたが、異端が三位一体をも否定していたからです。なので、父なる神様とずっと共におられたということを強調しながら、イエス様は完全な神であり、また完全な人として、私たちの救い主として来られたということを証しているんです。

この1-2節で思い出される聖書箇所はないですか？そうです。ヨハネの福音書の1:1-5のみことばです。

1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

2 この方は、初めに神と共におられた。

3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。

4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。

5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

ここでもヨハネの手紙に出てくる言葉がたくさん出てきますよね。ここで語られている「この方」とは誰でしょうか？イエス・キリストです。ヨハネ1：14にはこうあります。

14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

また、ローマ8：3後半にもこのようにあります。

3 神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。

私たちが信じているイエス様は空想でも、幻でも、錯覚でもなく、復活し今も生きて働かれています。そして、私たちが祝福に歩ませてくださる方です。今を生きる私たちにもイエス様の声を聞くことができるように、見ること、しかもじーっと見ることができ、触ることができるようにしてくださっています。毎週の礼拝を通して、クリスチャン同士の分かち合い交わりを通して、デイポーションを通して、祈りを通して、主がよみがえり生きておられ、私たちと共にいてくださっていることを、五感を用いてイエス様を実感できることが、確かめることができる恵みが与えられています。そして、この世界の大自然や花々を通してイエス様を感じられ、また互いのうちに生きておられる神様を感じれるのがクリスチャン、私たちです。皆さんは、今五感をフル活用してそばにおられるイエス様を実感していらっしゃるのでしょうか？実はイエス様に会っています、そのことに気づいているのでしょうか？イエス様は思った以上に私たちの近くにおられます。私たちがその愛で、臨在で包んでくださり、かたときも離れずそばにいてくださっています。そして、それは私たちがどんなにいても変わらずです。

イエス様は十字架にかかれる前に言われました。ヨハネ16：31-33

31 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは今、信じているのですか。

32 見なさい。その時が来ます。いや、すでに来ています。あなたがたはそれぞれ散らされて自分のところに帰り、わたしを一人残します。しかし、父がわたしとともにおられるので、わたしは一人ではありません。

33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」

イエス様のそばにも父なる神様が共におられたと。そして、私たちが苦難の中でも、平安を得て勝利することを願い、勇気を出しなさいと励まされました。今日の箇所では、イエス様に続いてヨハネも、私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたが

たも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。

私たちがこのことを聞いて、イエスキリストとの交わりに、喜びに加えてくれています。何よりも、復活されたイエス様が、「平安があなたがたにあるように」と手をあげ祝福しながら天に戻られました。その祝福の手を下さずにです。「そして、私と一緒にさあ行こう」とクリスチャンの喜びと恵み溢れる歩みへと私たちを導いてくださっています。そのイエス様の私たちへの思いを最後にご一緒確認しメッセージを終わろうと思います。

ヨハネ 17 : 1 - 26

祈ります。